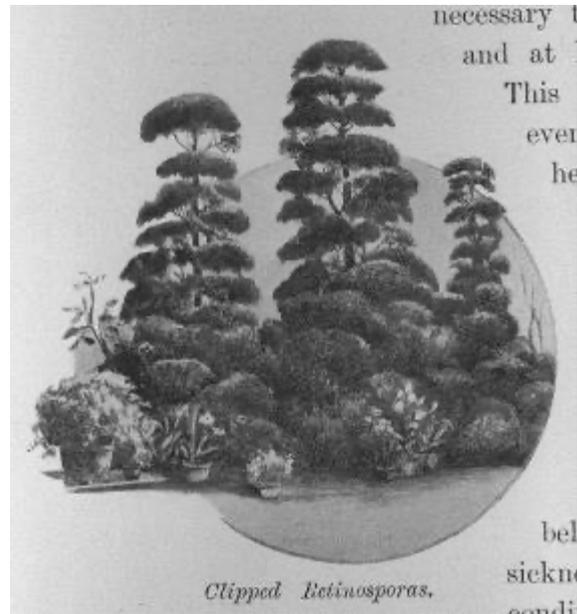


第2回

## 日本の植物とプラントハンター



- 1 プラントハンターはつらいよ
- 2 世界を変えた日本の植物
- 3 博覧会とジャポニスムの流行

### ■ 歴史の流れをざっくりとつかまえる

「植物生活」のトークイベントでは、限られた時間で話をする必要があるので、できるだけ大づかみで見たいと思う。今回は、江戸幕府による封建体制（幕藩体制）から、明治以後の市民による資本主義体制の近代国家（統一国家）へと日本の社会が移り変わる時代を見ていこう。

### ■ 植物を見つめるまなざし、ニーズ（需要）から検討する

花卉装飾の歴史をひもとく、ということ、誰がどのように植物を扱っているかを見ていくのはもちろんだが、幅が広すぎて全体を見失うおそれがある。そこで、植物が「どのように求められ使われていたのか」を調べる必要がある。そのニーズに対して、供給が行われ、生産や装飾の技術が高度化していくという順番。

### ■ 日本には欧米人にとって魅力的な植物（固有種・耐寒性・園芸品種）があった

・欧州、北欧は広い地域にわたって過去に氷河に覆われたため植生が乏しいといわれる。日本はその影響が少なく植物の逃避地（glacial refugium）にあたる。また南北に長く高山も湿地もあるという環境に多様な植物が存在する。

### ■ 日本は花卉・庭木など観賞植物改良のセカンダリー・センター（第二の中心地）

・栽培植物研究者、中尾佐助は観賞植物の品種改良は歴史的にまずオリエント古代文明（例：バラ）とイスラム文明（例：チューリップ・アネモネ・ヒヤシンス・ライラックなど）に最初の動きが見られ、16世紀以降ヨーロッパに導入、改良が進む。中尾はオリエント・イスラムを「プライマリー・センター」と呼び、ヨーロッパは「セカンダリー・センター」と呼ぶ。

・同様に、中国もまた世界の「プライマリー・センター」であり、日本は「セカンダリー・センター」という関係になる。

・歴史的に花卉・庭木の重要な品種改良が行われたのはオリエントと中国、その後のヨーロッパと日本だけである。

・幕末期に世界市場に登場した謎の国「日本」に植物を求めて数多くのプラントハンターが次々とやってきた。みな、新しく価値ある植物を手に入れ、富と名声を得ようと競って各地を巡って植物を集めた。



江戸幕府、第8代将軍 徳川吉宗（1684～1751）

「享保の改革」で知られる。在職は1716～1745の30年だが9代家重にも影響

○江戸幕府は鎖国政策を取っていたが、「長崎、薩摩、対馬、蝦夷」という「4つの窓」から海外の商品や情報を得ていた。

○本草学（ほんぞうがく）とは、中国の薬物学で、薬用とする「植物・動物・鉱物」の、形態・産地・効能などを研究する学問。日本では江戸時代に全盛をきわめ、中国本草書の翻訳・解釈にとどまらず、日本に自生する植物・動物などの研究に発展した。この本草学の基礎文献に李時珍の『本草綱目』がある。

○李時珍『本草綱目』1596年→1604年以前には日本に到来していた。『本草綱目』は、動植物の名前と形態、特徴がまとめられた辞典。中国の書籍には絵図のないものが多く、これもそのひとつ。文字だけだが、日本人の本草研究に大きな影響を与え、その後も中国からたびたび輸入された。和刻本も続出し、幕末に至るまで基本文献として尊重される。幕府の恒常的な財政難を改善し、繰り返される「飢饉」に備えるため、いくども行政の改革が行われた（享保、寛政、天保など）。そのたびに殖産興業のためにコメ以外の土地にあった作物を奨励する動きが起きる。最初に強く進められたのは8代将軍吉宗による享保の改革の時代だった。

○8代将軍吉宗は、儒学以外に社会改革に役立つ実学を奨励した。その一環として1720年、洋書輸入の禁が緩和され蘭学が奨励される。青木昆陽、杉田玄白、前野良沢、平賀源内らが活躍する時代となった。この時代の海外の科学や学術情報によって日本でも天文学、地理学、植物学、物理学なども発達する基盤ができていく。具体的には、正確な暦や地図の作成が進められるようになる。後年、伊能忠敬により日本地図が完成するが、伊能のプロジェクトの目的は実測により子午線の長さを割り出し、地球の大きさを確定することにあったと言われている。

○吉宗は増え続ける薬や砂糖などの輸入で莫大な金銀が海外に流出するのを減らすように国内での生産、自給を奨励した。そのため、全国的に動植物への関心が高まった。吉宗の物産政策として以下の4点が挙げられる。①採薬使の派遣、②全国的な動植物調査(1735～38)、③海外産動植物の調査(漢名で記されている動植物が和産のどの品に当たるか、日本での自生の有無等の疑問を解くために、実物を取り寄せての調査も行われた)、④海外産植物の国産化(国内に自生しない薬草や有用植物は、移植、栽培化を目指し、朝鮮人参やサトウキビのような外国産の有用植物の国産化を支援した)

○江戸の園芸は、徳川三代(家康・秀忠・家光)が「花癖」と言われるほどの園芸好きとして知られ、そのために全国の大名がそれぞれの土地にあった園芸文化を育てるきっかけとなった。元禄時代や文化文政期のように経済が好調な時期には園芸も発達し、多様な園芸書が数多く出版された。

○江戸には諸大名の屋敷が構えられ、参勤交代とともに多様な園芸植物が江戸に集まった。火事の多い江戸では要所にひろい火除け地がつくられたが、この空き地には植木溜めや薬草園がつくられることが珍しくなく、やがて世界的に有名になるガーデンシティの趣を呈していく。幕末に日本にやってきたプラントハンターは江戸で大規模な植木屋が軒を連ねている様子に驚いた。

■ 日本の本草学者の系譜 稲生若水から小野蘭山、伊藤圭介まで

【稲生若水(いのうじゃくすい)】1655-1715 京都

医学者、本草学者、儒学者、蘭学者「本草綱目」を補う博物書『庶物類纂』の編纂の下命を得て研究を続けた

【野呂元丈(のろげんじょう)】1694-1761

日本最初の西洋博物学書『阿蘭陀本草和解』を著した(ドドエンスの本草書)

【丹羽正伯(にわしょうはく)】1691-1756

享保5年(1720)に江戸幕府の採薬使に任じられ、野呂元丈・植村政勝らと箱根や富士などの中部地方、さらに東北各地の採集を行い、採集された薬草は、駒場や小石川養生所の幕府の薬草園で栽培が試みられた。師の稲生若水から引き継いだ本草学書「庶物類纂」をまとめる。その後、吉宗の意を実現すべく日本全国の動植物、鉱物等産物を網羅的に調査した「諸国産物帳」を編纂した(のちに散逸)。

【植村政勝(うえむらまさかつ)】1695-1777 通称:佐平次

宝永7年(1710年)に紀伊藩主徳川吉宗に召されて御庭方となり、吉宗が将軍に任ぜられるとこれに従っ

て江戸城に入り、江戸幕府御庭番となった。享保 5 年（1720 年）に幕府駒場薬園の園監に任ぜられ、採薬使を兼ねる。以後、30 年以上にわたって諸国の草木の実地踏査を行い、各地で未知の動植物を発見して『諸州採薬記』に記録として残し宝暦 5 年（1755 年）に幕府に献上された。

【松岡玄達（まつおかげんたつ）】 1668–1746 通称：恕庵（じょあん） 京都  
儒学者・本草学者。門弟に小野蘭山、戸田旭山（大坂で薬品会＝ミニ博覧会開催、平賀源内の知人）など

○シーボルトに影響された人々に注目

【小野蘭山（おのらんざん）】 1729–1810 京都  
江戸時代の大本草学者。「日本のリンネ」。門弟に杉田玄白、木村兼葭堂、飯沼慾斎、谷文晁、水谷豊文など  
著書『本草綱目啓蒙』

【水谷 豊文（みずたにとよぶみ・ほうぶん）】 1779–1833 名古屋  
江戸時代後期の本草学者。尾張藩御薬園御用、嘗百社盟主。  
嘗百社（しょうひゃくしゃ）は江戸時代後期に尾張国名古屋で結成された本草学研究会。尾張藩の医者、藩士、民間人等により構成され、定期的に博物会を開催、尾張近郊へ採薬旅行に出かけ、数多くの標本、図譜、採薬記類を残した。伊藤圭介もここに参加する。

【伊藤 圭介（いとうけいすけ） 1803–1901】 名古屋  
幕末から明治期の本草学者・蘭学者・博物学者・医学者。日本初の理学博士。男爵。「雄しべ」「雌しべ」「花粉」という言葉を作った事でも知られる。

【田中芳男（たなかよしお）】 1838–1916 東京  
幕末から明治期の博物学者、動物学者、植物学者、農学者、園芸学者、物産学者。錦鶏間祇候、男爵。東京国立博物館や上野動物園の設立に携わり「日本の博物館の父」と呼ばれる。パリ万博やウィーン万博での日本の出展に貢献し殖産興業や啓蒙活動に努めた。元老院議員、貴族院議員、大日本山林会会長、日本園芸会副会長を歴任した。

【牧野 富太郎（まきのとみたろう）】 1862– 1957 は  
日本の植物学者。高知県高岡郡佐川町出身。小野蘭山の「本草綱目啓蒙」に出会い、本草学とりわけ植物学に傾倒する。近代植物分類学の権威「日本の植物学の父」



(写真1) イギリス、キュー植物園のパームハウス (撮影：みずのともこ 2017年)

## 1、プラントハンターとは？どんな仕事？

- 世界中から有用な植物を集める (Plant collector)
- 植物学者にして冒険家 (園芸界のインディ・ジョーンズ)
- 強力なスポンサーにより派遣、大きな報酬と支援があった

### ○プラントハンターとは、

「未知の地の植物を生きたまま、種子で採集したり、細密な絵を書いたり、標本で記録したりする探検的要素を持つプロフェッショナル」。

その多くは

- 1、園芸家、庭師、農家の息子などであり、
- 2、出自や学歴は決して上流ではなく、中流から下。
- 3、しかし植物への情熱が人一倍強く、フィールドを好む野外の観察者、採集者だ。

職人的な気質、科学的な観察眼、識別能力を備え、どんな植物に商品価値があるかを熟知している。

植物を良い状態で輸送するために船員や税関、検疫役人、現地の園芸家との交渉、買い付け、一次的に植物を植えておく庭園の確保など実務処理にも長けている。このように、植物を探すだけでなく、旅に伴うさまざまな雑事や危険などすべて自分で対応できる人たちだった。

彼らは野生植物だけでなく、栽培・改良された園芸品種でも優良なものを見つけて本国に届けた。

中国や日本には歴史のある園芸文化があり、そこにあるネットワークを活用することもプラントハンターの重要な仕事だった。

プラントハンターは採集旅行実現にあたって大きな予算が預けられるため、持ち逃げされたり、採集物の横流しなどが無いよう、よほどの信用がなければならない。そのため、人選には十分に時間をかけられた。体力、精神力、植物の知識はもとより、性格、恋愛を含む人間関係等も調査された。性格では、多少の失敗

でもめげない前向きなタイプが選ばれただろう。

技術的には、雇用する植物園や種苗会社が、プラントハンターに対して標本の作成法、増殖用の生体株の採集方法、ワーディアンケースの使い方などの実務的なことを集中的に教えこんだ。旅行中はかならず日誌をつけること、その写しを取って必ず一部を会社へ送ることといった細かな約束事が契約に入っていたようだ。私たちは、残された日誌やそれをもとに出版された著作によって彼等の見たこと、感じたことを知ることができる。

16、17 世紀にかけて欧州帝国の拡大期には食用、薬用の植物、繊維や嗜好品などの有用な植物資源（経済植物）が次々と見つかるとともに、植民地での大規模な栽培が産業になる。綿花、キナノキ、茶のようにイギリスの繁栄の基礎をなす産業革命や植民地経営に欠かせない重要な植物もあった。

### 「資源植物（役に立つ植物）」、「世界商品」の移植と生産

#### ●キュー植物園が国立植物園となる以前

【砂糖】 ニューギニア原産 16 世紀から 17 世紀にカリブ海、西インド諸島で生産

【タバコ】 17 世紀に中米原産、北米南部地域でプランテーション化

【綿花】 中米原産の綿花が 18 世紀初頭に北米の英国領へ

※ワタノキからは布だけではなく石鹸、マーガリン、食用油などが作られる

【コーヒー】 17 世紀に需要開拓 ジャワから南アメリカ、モーリシャスなど赤道周辺地域へ移植

※18 世紀に茶に替わられる

【カカオ】 南アメリカ原産、ブラジルやアフリカへ

【ケシ】 19 世紀トルコ以東原産、インドで栽培されアヘンに加工し中国へ

【パンノキ】 18 世紀ポリネシア産のパンノキを西インド諸島へ（奴隷の食糧）

#### ●国立植物園以後(1840 年～)

【お茶】 中国産のチャノキをインドのダージリン地方やスリランカへ

【ゴム】 アマゾン川流域産のパラゴムノキをマレー半島へ

※ゴムの製造方法の革新と海底ケーブルの絶縁体としての特需（その後タイヤへ）

【キニーネ】 キナノキをペルーからインドへ

※マラリアの特効薬キニーネ（キナノキの樹皮） 熱帯地域への進出、植民地化に貢献

日本の植物にはそのような巨大な経済植物は見つからないが、時代が求める植物は「観賞植物」に広がっていた。17 世紀オランダの「チューリップ熱」に見られるように園芸は経済的にも価値あるものとして認められ、19 世紀のイギリスで力を誇ったヴィーチ商会は世界各地にプラントハンターを派遣する。さらに世界から集めた植物を交配して生み出した園芸品種はセンセーションを巻き起こしていた。

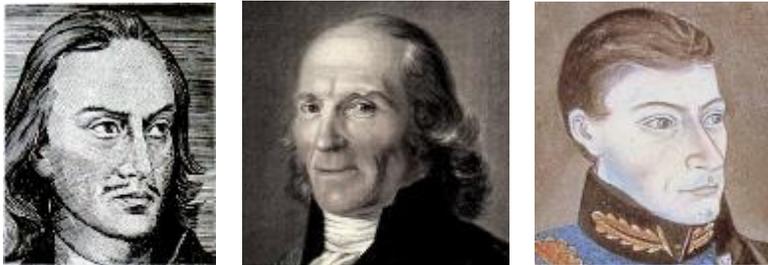
極東の島国、日本は欧州で露地栽培できる耐寒性が期待でき、多くの植物が海を渡った。

### ■日本を訪ねたプラントハンター

1853年にアメリカの軍艦4隻によるペリー提督の艦隊（蒸気帆船2、帆船2）が浦賀沖に現れ、大統領の親書を持って退去、これを機に開国、維新の時代に入る。ペリー艦隊の太平洋遠征は太平洋からアフリカ、インド、フィリピンを経て琉球、小笠原諸島を回ってやってきた。この間、同乗した科学者による調査、標本の採集などが行われている。プラントハンターは4名も乗り組んでいたという。

日本の開国はプラントハンターたちにとって待望のニュースになった。日本の情報は17世紀のケンペル、18世紀のツンベルク、19世紀のシーボルトという日本研究の先駆者による著作でのみ知られていた。

実際に開国後、プラントハンターの来日は急増したという。



左からケンペル（独）、トゥーンベリ（スウェーデン）、シーボルト（独）

来日は、それぞれ1690～92年【17世紀末】、1775年【18世紀】、1823～28年（2回めは1859～62）【19世紀】 日本の植物のみならず、日本の風土と文化をヨーロッパに紹介する大きな役割を担った。

白幡は1854年から1926年までに来訪した人物を36名リストアップしているが、そのうち23名が1863年までに来日している（まだ明治になっていない「攘夷」盛んな時期で、命の危険があった）。

ビッグネームとしては、シーボルト（蘭／独・再訪）、フォーチュン（英）、J・G・ヴィーチ（英）、マキシモヴィッチ（露）らがいる。彼らは日本の野生植物および園芸植物を調査し本国に送り込んだ。

野生植物では漆器の材料となるウルシ、和紙の原料となる植物、それから果樹や野菜などを求めた。このほか、耐寒性のシダ類がとても人気だったという。アオキ（特に斑入り種）、コウヤマキ、イヌマキ、シキミ、ナギ、カキ、ユリ、キクなどが本国の雑誌に図入りで紹介され、驚きを持って迎えられた。

日本を目指してやってきた各国のプラントハンターには、採集の目的にそれぞれ特徴があった。アメリカは有用植物・農作物、イギリスは全般的に見ているが主に観賞用・園芸植物に、フランスとロシアは純粋に植物学的な関心のもとに野生植物の採集を中心に活動した。



【1860年来日】ジョン・グールド・ヴィーチ（J.G.ヴィーチ、1839～1870）

「ヴィーチ王朝」と呼ばれるほどの隆盛を誇ったイギリスの園芸商。プラントハンターを養成し22名の専門家を世界に送り出した。このヴィーチ商会の一族にあってJ.G.は自ら海外に出て収集に力を入れた。自由な行動ができないなかで長崎周辺で探索し、野菜、薬草、香草、灌木、樹木の種子、および6箱のシダ

を本国に送付した。J.G.の時代はシダが流行しており、日本の耐寒性のシダを有望視した。ヴィーチはその後幸運にも江戸に船で向かうことができ、駐日総領事オールコックの富士登山に同行した（驚くことに「富士山の植生分布図」まで作っている）。ヤマユリ、カラマツ、ヒノキ、ナツツタなどを広めた。彼は日本の針葉植物の価値を発見し、のちのマリーズへと引き継がれる。

【1892 年来日】ジェイムズ・ハーバート・ヴィーチ (J.H.ヴィーチ、1868~1907) は J.G.の息子、第 4 代目として自分も東洋を旅し、のちには、ウィルソンらを派遣する側に回った。



【1860~61 年来日】C.J.マキシモヴィッチ (1827~1891) 日本植物を大量に採集し命名、日本植物の権威となる。牧野富太郎はマキシモヴィッチに師事しようとロシアをめざすが、その前に亡くなってしまった。イチハツ (日本の茅葺屋根の上によく見られた)、ドロヤナギなどが有名。

【1860,61 年来日】ロバート・フォーチュン (1812~1880)

フォーチュンはチャノキを中国からインドに移入した功績が大きい。中国奥地に入り込んだ最初のプラントハンターで 4 度も旅をした。キク、ボタン、カザグルマ、ハス、フジ、ツバキ、キンカン、シャクナゲの導入でも有名。ウォードの箱を活用して大きな成果を上げた。中国では何度も命を狙われるが自力で切り抜けた。日本には 9 か月あまり滞在した。植木屋や墓地を重点的にまわり、営利栽培向きのものを集めた。フォーチュンの功績でアオキの雄木が欧州に入り、ようやく赤い実が見られるようになった。このほかにはヤマユリ、クリンソウ、マキ、イヌマキ、アセビ、シキミ、アスナロ、ウツギ、ツツジ、ツバキ、トベラ、クチナシ、スイカズラ、アヤメ、シモツケ、ヤマブキ、センノウ、オニユリ、トサミズキ、マンサク、ナギなどをもたらした。中国で見つけたキクのほんとうのルーツが日本にあることを知る。

「日本人の国民性の著しい特色は、庶民でも生来の花好きであることだ。花を愛する国民性が、人間の文化的レベルの高さを証明する物であるとすれば、日本の庶民は我が国の庶民と比べると、ずっと勝っているとみえる」という言葉を著書『幕末日本探訪記—江戸と北京』に残している。



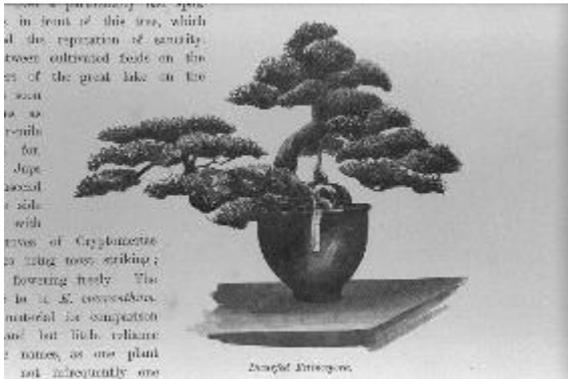
【1877,78 年来日】チャールズ・マリーズ (1851~1902)

【1914 年来日】アーネスト・ヘンリー・ウィルソン (1876~1930)

マリーズは日本の東北から北海道を巡って新しい針葉樹をさがした。その成果はアオモリトドマツやツリシノブ (シノブ玉)、ツツジ、カエデなどが知られる。イギリスでは自然風庭園が流行し、人間が手を入れずに自然な樹形を楽しむスタイルが重視されており、コウヤマキやカラマツなど日本の針葉樹の美しさには大きな価値があった。ドワーフコニファーの多くも日本産のものが注目された。台湾ではタカサゴユリの種

子を本国に送っている。中国で見つけたプリムラ・オブコニカは後に大品目となった。

ウィルソンはヴィーチ商会最後のプラントハンター。中国と朝鮮、日本を繰り返し訪ね、重点的に調査した。中国でユリのリーガル・リリーを発見し、品種改良に大きな貢献を成したが、旅の途中でがけ崩れにあって片足を骨折し、その後は一生不自由な生活となった。日本ではサクラを研究したほか、クルメツツジの品種紹介等、さまざまな園芸種を細かく欧米に紹介した。



J.H.ヴィーチの『旅行者の手記』から

## 2 世界を変えた日本の植物

日本が今日の世界文明に貢献した要素として、江戸時代の花卉、庭木の園芸の成果は非常に大きい。日本の浮世絵が西洋文化にあたえた刺激より、園芸植物のあたえた影響のほうがはるかに大きいと評価してもよい。日本というセコンダリー・センターは、このようにたいへん立派なものである。(中尾佐助『栽培植物の世界』)

- 移出経路が知られていない日本原産の園芸植物もある（クレマチス、アジサイ、ハランなど）
- 「黒船」以前から日本の植物は欧米で知られはじめていた（ケンペル・チュンベリー・シーボルト）
- 以外な植物が欧米で流行（ソテツ、ハラン、ススキ、ツリシノブ、クズ、オオイタドリ）

■ ソテツは明治初期に来日したドイツ人プラントハンター、ワグナーによって本国に大量に送られ、葬儀の花のグリーンとして使われ流行する。主に乾燥葉を緑に染めて利用されていた。当時、ドイツでは富裕層が温室を持ち「ヤシ類」を育てるのが流行しており、葬儀の際には貴重なヤシの葉が用いられた。ソテツはヤシの葉の代用として重宝された。

ワグナーがソテツの産地として発見したのは日本の奄美大島だった。奄美大島に滞在し、荷造りをして神戸からドイツへ送って一財産を築き、大邸宅を建てたという。「ソテツのワグナー」と呼ばれた。ワグナーの成功を追いかけるように、横浜のベーマー商会も動いた。のちに横浜植木商会を立ち上げる鈴木卯兵衛とベーマーは自ら沖縄本島と奄美大島を見てまわり、奄美が本産地として適していることを知ると、ここから大量のソテツの株と葉を出荷している。2人のあとに行ったアルフレッド・ウンガーはさらに多くを送り出したが、数年でドイツの関税が増やされることになり、その実施前に大量に送り込んで一段落させている。

奄美大島では現金がほとんど役に立たないため、鹿児島で小銭に両替して持ち込んだり、大量の木箱を製作してから島に渡っている。

ヤシのブームを牽引したひとつの要因は当時、文化の中心となっていたウィーンの画壇で「画家の王」と呼ばれたハンス・マカルトのサロンの装飾スタイルがあった（マカルトの名は生まれ故郷のザルツブルグの橋に残っていて、この橋は恋人たちが欄干に鍵をかけるので有名）。ドライの植物や、パンパスのようなイネ科の穂、ヤシ、孔雀の羽といったものを縦長に束ねたダイナミックな装飾が「マカルトの花束」と呼ばれ広まった。現在で言えば「シャンペトル風」、ジャポニズムのいけばな的なイメージがある。マカルトブーケの色合いは淡く、柔らかい雰囲気、ペイントした硬いソテツの葉の人気は急速に失われたという（アメリカでは生葉、ドライともに需要が広がる）。マカルトは若くして亡くなったために日本人にはなじみが薄い、マカルトの後を引き継いだグスタフ・クリムトラが世紀末のウィーンを舞台に新しい芸術集団をつくり、生活と芸術が一体化したムーブメントを生み出していった。

■ハランの原生地は、日本。鹿児島県の南西部にある宇治向島、黒島、諏訪之瀬島が知られる。食物を包んで運んだり調理したりしていただろう。住民が身近な所に植え替えていたかもしれない。これらの島々は古い交易ルート上にあり、おそらく古い時代に中国を経由して、19世紀にヨーロッパに入り、ベルギーなどで大量生産された。カフェにはかならずあるというくらいに広まって「Café Orchid 居酒屋の蘭」と呼ばれていた。

### 3 博覧会とジャポニズムの流行

- 開国前後、日本は国宝級の美術品で世界にアピールした
- 日本庭園、盆栽、いけばなは「生きている工芸品」
- 横浜植木の海外支店（米・英）とフラワーショーへの出展

#### ■ 幕末から明治にかけて欧米で行われた博覧会とその出展物の傾向

開国前後、日本は国宝級の「美術品」で世界にアピールした

（産業革命以前の段階にあった日本から世界へ打ち出せるものは美術工芸品くらいしかなかった）

日本は、積極的に博覧会に出展（常連だった）、国宝級の美術工芸品を展示した（のちに輸送船が遭難する事故などあり、複製品を出店するようになるが最初のうちは「ホンモノ」を出していた。

1851年 ロンドン万国博覧会（第1回）

1853年 ニューヨーク万国博覧会

1855年 パリ万国博覧会（第1回）

1862年 ロンドン万国博覧会（第2回）

駐日イギリス公使オールコックにより日本の伝統工芸品が初めて展示される

**1867年 パリ万国博覧会（第2回）**

幕府及び薩摩藩・佐賀藩が出品 水戸藩の徳川昭武、渋沢栄一らがパリへ

**1873年 ウィーン万国博覧会**

**日本政府として初めての公式参加、日本館を建設**

1876年 フィラデルフィア万国博覧会

アメリカ独立 100周年記念祭典

1878年 パリ万国博覧会 (第3回)

1880年 メルボルン万国博覧会

☆1884年 ロシア万国園芸博覧会☆

1884年 ニューオリンズ万国博覧会

1888年 バルセロナ万国博覧会 (第1回)

1889年 パリ万国博覧会 (第4回)

1893年 シカゴ万国博覧会 (第1回)

コロンブスのアメリカ大陸発見 400周年記念祭典

1897年 ブリュッセル万国博覧会 (第1回)

1900年 パリ万国博覧会 (第5回)

## 20世紀

1904年 セントルイス万国

1905年 リエージュ万国 1906年 ミラノ万国博覧会

☆1910年 日英博覧会☆

1910年 ブリュッセル万国博覧会 (第2回)

1913年 ヘント万国博覧会

1915年 サンフランシスコ万国博覧会 - パナマ運河開通ならびに太平洋発見 400周年を記念

1925年 パリ万国博覧会 (第6回) いわゆるアール・デコ博覧会

☆印の博覧会は万国博覧会ではないが、園芸的史に重要な博覧会

○ 日本庭園、盆栽、いけばなは「生きている工芸品」

日本の絵画作品を示すものとして陶器、花瓶なども含まれていた



1893年 シカゴ万国博覧会で制作された日本館「鳳凰殿」と庭園。鳳凰殿は平等院鳳凰堂をモデルとし、平安中期(藤原)・室町(足利)・江戸(徳川)の各時代を表現した三棟の建物を連ね、日本の歴史の長さを強調した。この建物は、フランク・ロイド・ライトに大きな影響を与えたという。日本庭園はヨーロッパよりもアメリカで人気となり、富裕層を中心に自宅の庭に日本庭園をつくるのが流行した。



1910年日英博覧会で制作された2つの日本庭園のようす  
左図の背景にある森は大きな板に描かれた巨大な背景画。

○ 横浜植木の海外支店（米・英）とフラワーショーへの出展

横浜植木は明治 23 年の早い時期にアメリカ西海岸オークランドにサンフランシスコ支店を出店、のちにニューヨーク、さらにはロンドンに支店を出した。

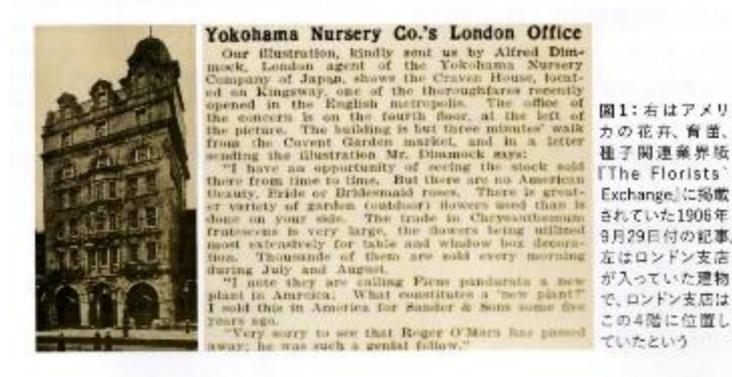


図1：右はアメリカの花弁、育苗、種子関連業界版『The Florists' Exchange』に掲載されていた1906年9月29日付の記事。左はロンドン支店が入っていた建物で、ロンドン支店はこの4階に位置していたという

※横浜植木はロンドン支店を拠点に RHS の品評会やチェルシーフラワーショーには始まった頃から出展を続け、昭和 14 年に至るまで 25 年間、ほぼ毎回参加していた。出展品目はツツジなどの園芸品種や盆栽、庭園模型などで、1914 年には優秀賞を受賞している。

○ 欧米に日本や中国等アジアの至宝を売りさばいた山中商会の支店（ボストン、ニューヨーク、ロンドン）では、工芸品や美術品以外に盆栽などの植物や日本庭園に使う石灯籠なども扱っていた。



ヤマナカのニューヨーク支店はものすごく立派な店構えだった。  
ブロードウェイの5番街の目貫通りに面していた。  
展示会も数多く開かれ、着物姿の女性が絵付きの花瓶にいけばなを実演してみせるなど  
日本文化の発信地にもなっていたと思われる。男性従業員も花を習っているようすもある。  
ヤマナカの社員は高学歴で語学堪能、上流階級の人々の相手をするのに慣れていた。



ボストン郊外のドーチェスターにあった「エクスペリメンタル・ガーデン（実験的庭）」  
という施設。輸入した日本植物を環境に慣らすためだったと思われる。写真のように  
盆栽類も数多く並べられている。温室もあったという。

当時ヤマナカでは仏像や石灯籠、などのガーデン資材も扱っていた。  
こうしたものを配した日本庭園がアメリカで流行っていた。

資料1 プラントハンター 白幡洋三郎 講談社 2005年

資料2 プラントハンター東洋を駆ける アリス・M・コーツ 八坂書房 2007年

資料3 プラント・ハンター物語 植物を世界に求めて T. ホイットル 八坂書房 1983年

資料4 絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化 近藤三雄他 誠文堂新光社 2017年

資料5 ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商 朽木ゆり子 2011年